

# 日本家計パネル調査ニュース第3号

2011年12月

## 第3号によせて

この日本家計パネル調査ニュースは、皆様の協力のもと今年2月に実施した「日本家計パネル調査（仕事と生活についてのおたずね）」、昨年4月に実施した「お子様に関する特別調査」、および、今年6月に実施した「東日本大震災に関する特別調査」の回答結果に基づき分析したものを、重要事項について抜き出し取りまとめたものです。皆様のご協力のおかげさまで、第3号を発刊できましたこと、心より御礼申し上げます。

日本家計パネル調査は、慶應義塾大学パネル調査共同研究拠点、文部科学省より「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」の採択を受けて、全国20歳以上の方を対象とした、家計や就業状況、健康状態などに関する調査であります。同じ方々に同じような質問を定期的に繰り返すことによって、人々の行動の変化を把握できるのがパネルデータです。このデータを使うことによって、様々な政策の効果や、社会情勢の変化に対する人々の反応を分析することが可能となります。

日本列島は今年、未曾有の自然災害に襲われました。自然災害という外的ショックに直面したことにより、直接的な被害を受けた方もそうでない方も、日用品の買い溜めの状況を変えてみたり、住宅の購入計画を改めたり、さらには、家族や社会に対する考え方が変わったという方が多くいらっしゃるかと思います。今年、皆様方に急遽ご協力いただいた「東日本大震災に関する特別調査」は、このような変化を捉え、今後の災害対策に向けて有益な提言を行うことを目指して調査したものであります。

さらに、昨年度は、小学生・中学生のお子様がいるご家庭を対象に「お子様に関する特別調査」を実施させていただきました。こちらに関しても、おかげさまで家計状況とお子様の学力に関する貴重なデータを収集することができ、わが国の代表的なデータとして、今後、国際機関と協力して、さらに研究を進めていくといった見通しも立っております。

このように研究活動を発展させていけるのも、ひとえに皆様方のご協力のおかげさまでであると深く感謝申し上げます。今後とも皆様のご協力を無駄にすることのないよう、研究員一同、調査・研究に邁進してまいります。パネル調査の重要性と意義についてご理解を賜り、来年度以降もご協力いただけますようお願い申し上げます。

慶應義塾大学パネル調査共同研究拠点 代表  
慶應義塾大学教授・商学部長  
樋口美雄

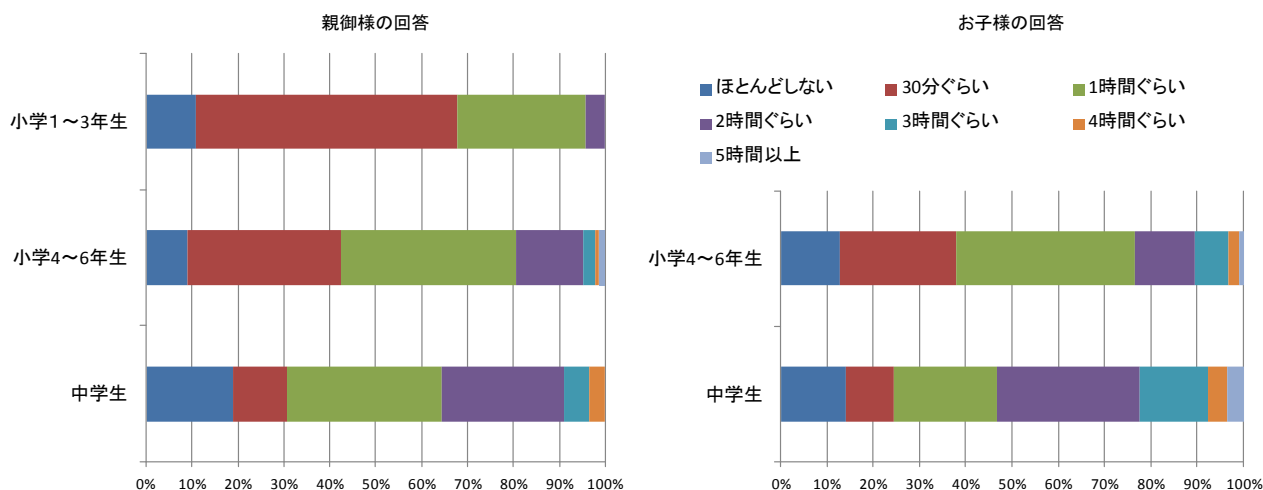
まず、お子様に関する特別調査の結果から見ていきます。

## 1. 学年が上がるほど、お子様によって勉強時間に差

### 子どもの勉強時間

日本家計パネル調査では、2010年より、小学生と中学生のお子様のいらっしゃるご家庭を対象に、「お子様に関する特別調査」を開始いたしました。お子様と親御様の両方に、継続してご協力いただき、日本でも非常に希少で貴重な調査です。ご協力いただいておりますお子様と、お父様、お母様には、心よりお礼申し上げます。

お子様の勉強時間



この調査では、お子様の勉強時間（塾や家庭教師などの勉強時間も含める）について、お尋ねいたしました。左側のグラフが親御様からのご回答、右側のグラフがお子様からのご回答で、それぞれ小学校低学年と、小学校高学年、中学生別に集計してみました。小学校低学年の場合、お子様にはお尋ねしていません。

小学校1年生から3年生では、ほとんどのお子様の勉強時間が30分程度であるのに対し、小学校4年生から6年生になると、1時間ぐらいのケースが増えていることがわかります。そして、中学生になると、2時間以上も増えますが、ほとんどしないお子様も増えていることが見てとれます。つまり、学年が上がるほど、お子様によって勉強時間に差がはっきりと現れてくるのが理解できます。

また、お子様ご自身のご回答の方が、親御様のご回答より、勉強時間が少し長めであることも興味深いです。この傾向はとくに中学生に見られ、お子様が中学生にもなると、案外親御様が思っている以上に、お子様は勉強しているのかもしれない。



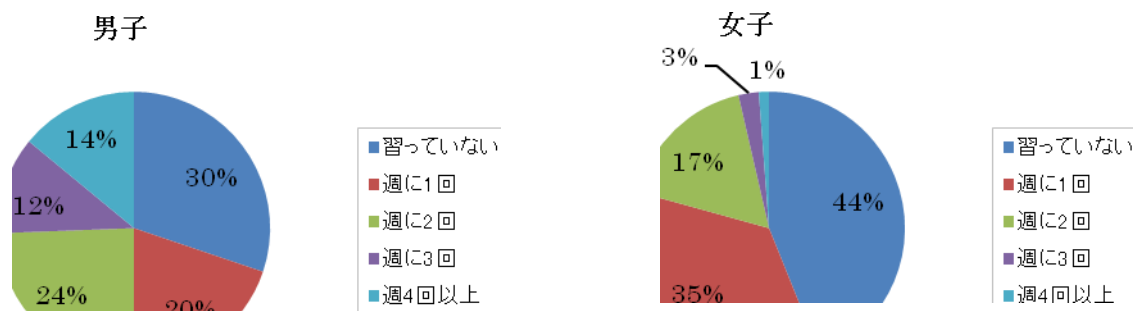
## 2. 運動系の習い事は、小学校低学年で高く、その後減少

### 運動系の習い事

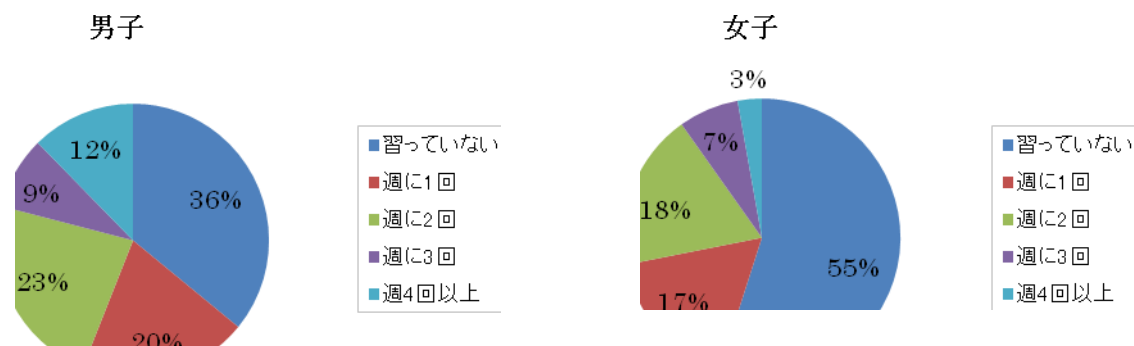
サッカーや野球など、運動系の習い事をしている子どもの割合は、小学校低学年男子では70%、女子では56%となっていました。小学校高学年になると、その割合は少し減少し、男子で64%、女子では45%となっています。このように運動系の習い事の頻度は高学年の方が少ない傾向がありました。これは、学年が上がると、運動から学習へと習い事に求めるものの変化するためと考えられます。

また、中学校では、運動系の習い事の頻度は非常に少なく、男子で24%、女子で15%となっていました。中学校で運動系の習い事の頻度が少ないのは、学校での部活の影響が大きいと思われる。つまり、中学校では部活が運動系の習い事の代わりとして機能しているものと思われる。

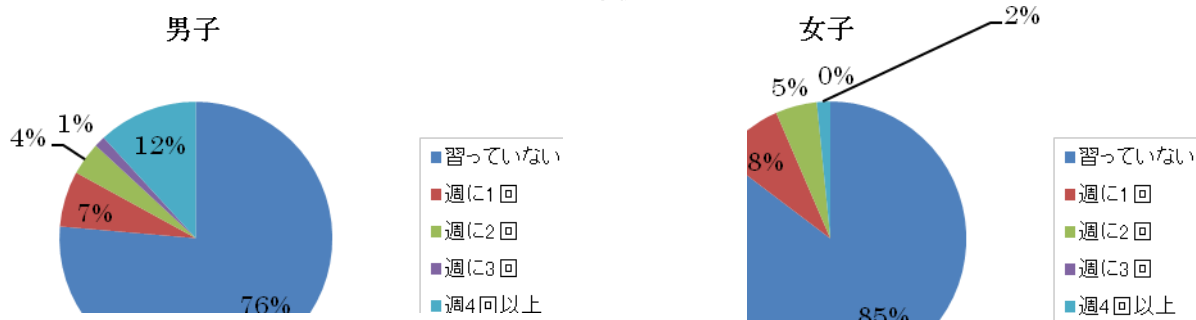
小学校低学年



小学校高学年



中学校

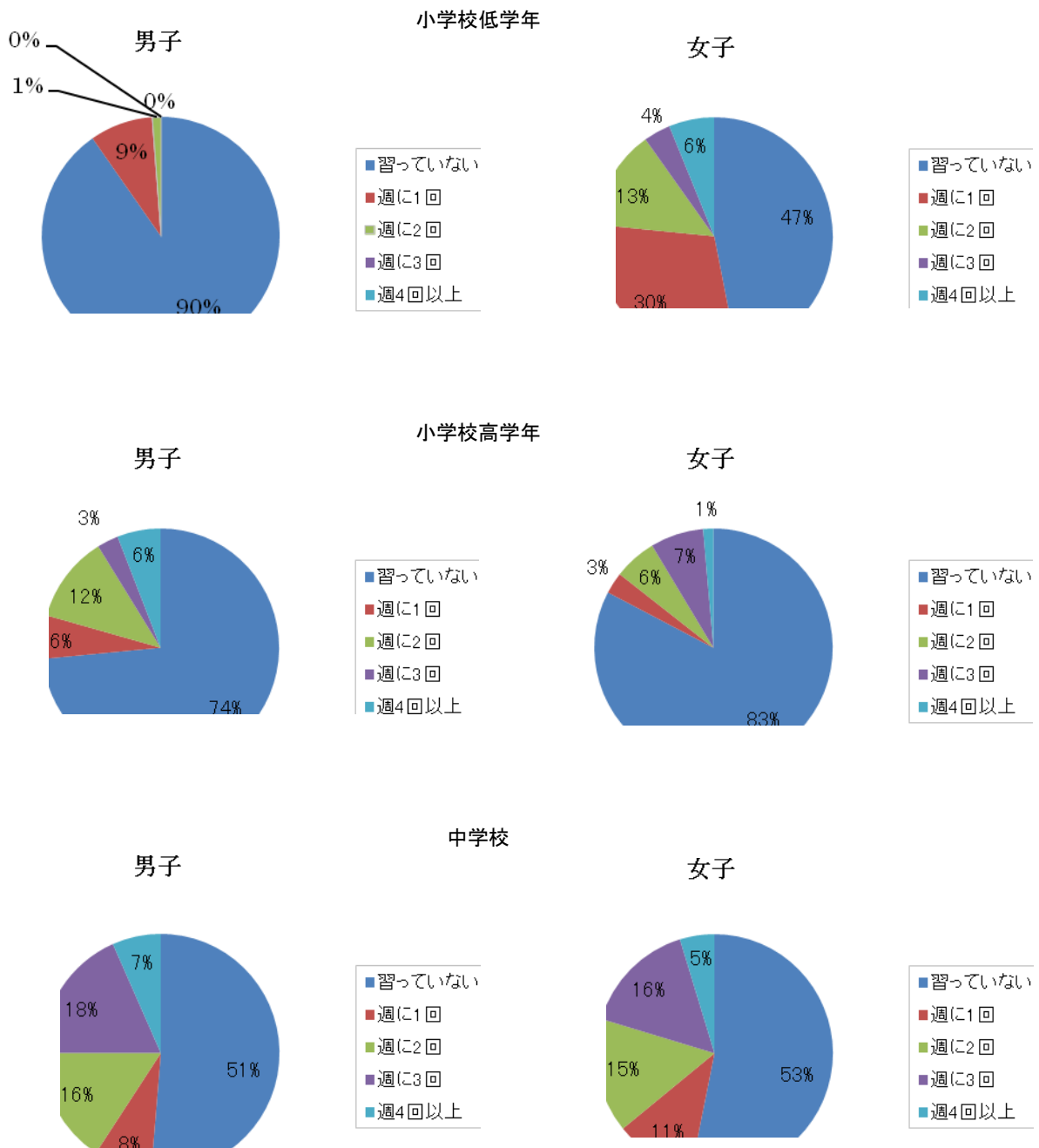


### 3. 中学校では、男女とも約半数の子どもが塾や家庭教師に通う

#### 塾や家庭教師の頻度

次に、塾や家庭教師の習い事の頻度を見てみましょう。塾や家庭教師は、小学校低学年では女子の方が多く通っている傾向が見てとれます。ただし、小学校高学年では男女に差は見られておりません。小学校低学年の段階では男子の習い事は運動系に偏っており、まだ学習は重視されていない傾向にあるのではないかと考えられます。

一方、中学校では、男女とも約半数の子どもが塾や家庭教師に通っていました。中学校に入ると高校受験が視野に入ってくるため、習い事として学習が重視されるようになり、塾や家庭教師に通うようになることがうかがえます。

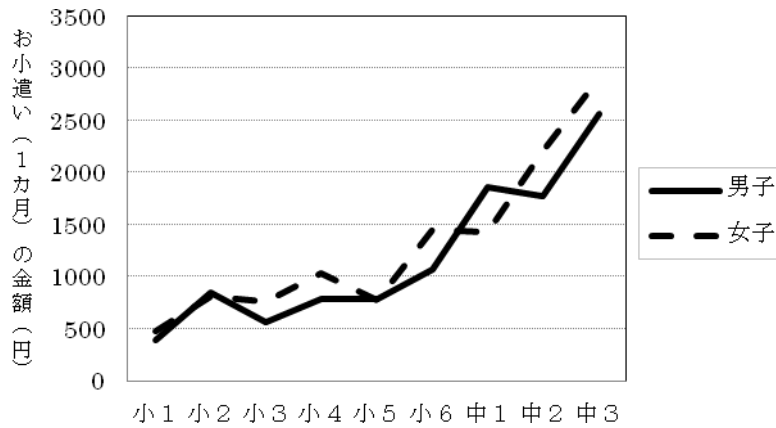


#### 4. 小1と小6の金額の差が約1000円なのに対し、中1と中3の金額の差が約1500円

##### 毎月のお小遣いについて

学年ごと、性別に、毎月のお小遣いの金額を集計したところ、どの学年においても男子と女子の間に顕著な差は見られませんでした。小学校1年生では平均して約500円のお小遣いは、学年が上がるにつれ上昇傾向にあります。

また、小1と小6の金額の差が約1000円なのに対し、中1と中3の金額の差が約1500円となっており、小学校に比べて、中学校の1学年の金額の差が大きくなっていることが見てとれます。小学校の時と異なり、中学校に入ると毎年のお小遣いのアップ率が大きくなるといった家庭は多いのではないのでしょうか。



ここからは、仕事と生活についての日本家計パネル調査の結果から見ていきます。

## 5. 考え方にくせはある？

### 考え方について

「すべてのペットはダリイである。」「すべてのダリイは植物である。」  
だから、「??？」

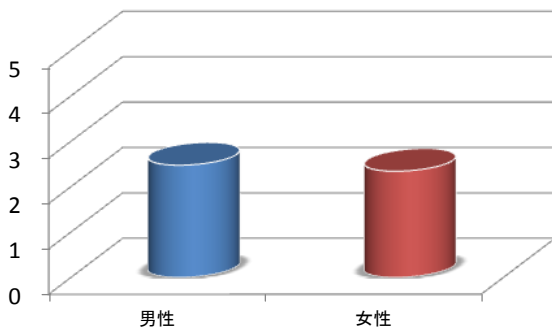
ご対象者の方は、最後にこんな感じのちょっと変な質問がいくつかあったことを覚えていらっしゃいますか？

「こんなの答えて何になるの？」とご不快に思われた方もいらっしゃったのではないのでしょうか。長いアンケートの終わりに、ご説明もなしに、たいへん申し訳ございませんでした。お詫び申し上げますとともに、ご回答くださいました皆様には改めまして、お礼申し上げます。^

こうした課題を三段論法と言います。古代ギリシャ時代、アリストテレスが分類した推論の規則であり、論理的推論と呼ばれているものです。2つの前提となる命題から、1つの結論を導くという形式的な思考の典型です。哲学や論理学、心理学では、こうした課題を説く鍵について研究を積み重ねてきています。そして、人の考え方のもとになるものや、考え方のくせが、人によってどのように違うのかを明らかにしようとしています。

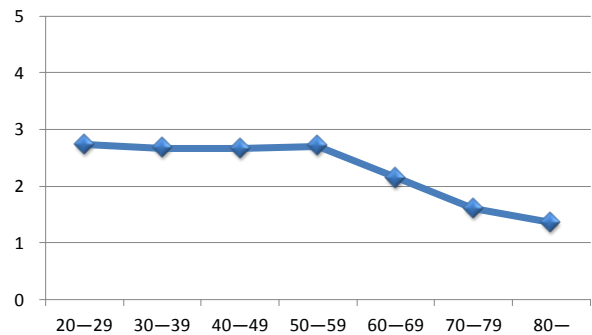
今回は初めて、アンケートの中で、三段論法を解いていただきました。まず、5問の正答数の平均値（平均点）を男女別に見てください。^

男女別平均点



ご覧のとおり、男性と女性の間にはほとんど差はありませんでした。男の人だから得意、女の人の方が得意といったはっきりした傾向はありませんでした。次に、年齢別に平均点をグラフにしてみました。^

年齢別平均点



50歳代まで同じ得点が続き、60歳から徐々に減少していることがわかります。といっても、これは今回のご回答者の皆様全員の平均点です。80歳代でも全問正解！の方もいらっしゃいました。唐突な問題にもかかわらず、ご挑戦くださいました皆様には、重ねて感謝申し上げます。



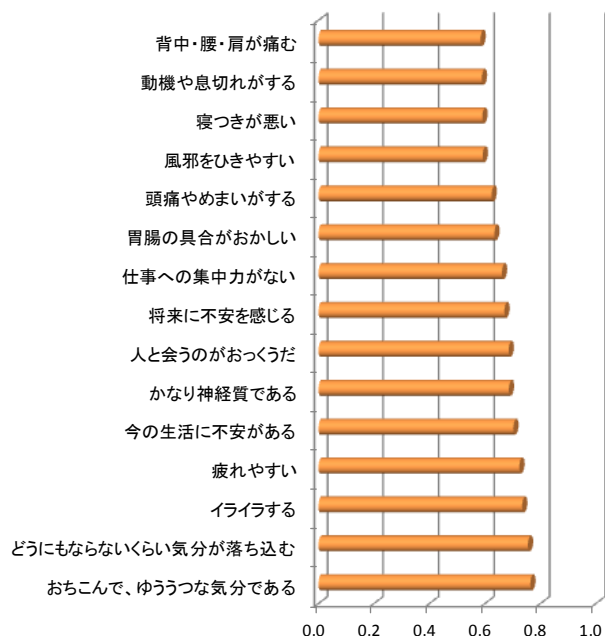
## 6. 病は気から？ 気は病から？

### 健康状態について

からだの調子と心の調子は、別のものなのでしょうか。それとも互いに関連し合っているのでしょうか。この問いに1つの答えを出してくれるのが、因子分析という統計学的方法です。身体的健康と精神的健康の両方の項目についてお尋ねした回答を因子分析してみたところ、両方の症状を合わせて、相互に関連性の高いひとつの「一般的な健康」として考えた方が、データをよく説明できることがわかりました。下のグラフでは、ひとつの「一般的な健康」を想定した時に、それぞれの項目がそれをどれぐらい説明するか（寄与率といいます）を、0 から 1 までの数値で比較しています。

一般的な健康への寄与率が低い項目から高い項目へ、上から順に並べましたが、上の方にはおもに身体的健康を、下の方には精神的健康を表す項目が集まりました。私たちは、たとえば、「胃腸の具合がおかしいこと」と、「将来に不安を感じる」とは、別々のことと考えてしまいがちですが、両者はひとつの身体と心に共通する一般的な健康を表す、関連の強い2つの症状と見た方がよさそうです。つまり、からだの調子のよい人は心の調子もよいし、心の調子のよい人はからだの調子もよい。でも、からだの調子の悪い人は、心の調子も悪くなってしまうし、心の調子が悪い人は、からだの調子も悪くなってしまう傾向にあるといえるでしょう。

体の調子と心の調子各症状の「一般的な健康」への寄与率

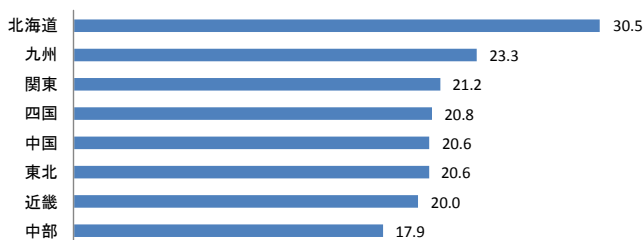


## 7. 生活習慣には地域差がある？

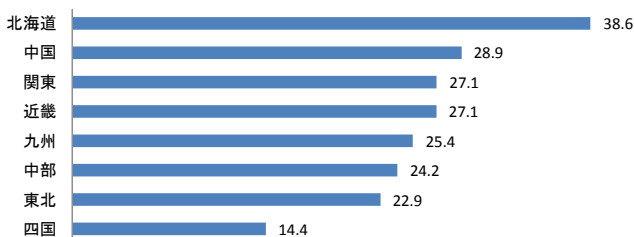
### タバコ、飲酒、健康維持などの生活習慣について

生活習慣は地域によって違うようです。まず、毎日タバコを吸う人の割合を見ましょう。第1位は北海道、第2位は九州、第3位は関東になります。中部のその割合は北海道の半分近くまで下がります。北海道の人はお酒を飲む回数も多いです。4割近くが週に3回以上お酒を飲んでいますが、健康維持に最もお金をかけるのは関東の人です。約4割が運動・ジムやサプリメントに出費をしています。

タバコを毎日吸う人の割合(%)



週3回以上飲む人の割合(%)



運動・ジム、サプリメントなど健康維持のための出費がある人の割合(%)



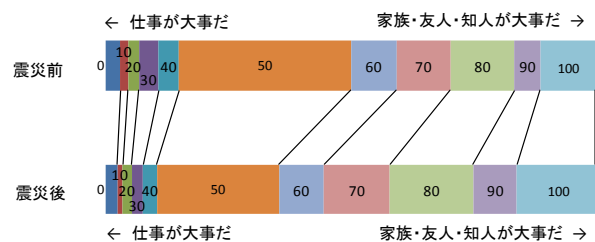
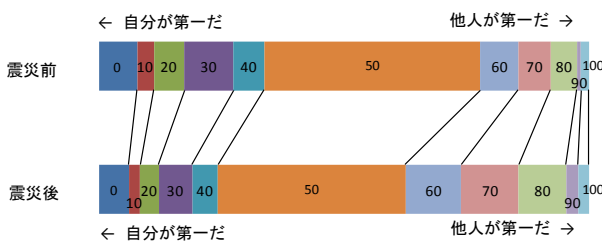
ここからは、東日本大震災に関する事柄を見ていきます。

## 8. 震災によって変わった人々の価値観

### 社会的な価値観

3月11日に発生した東日本大震災は未曾有の被害を出し、われわれに大きな衝撃を与えました。多くの人々がボランティア活動や寄付活動に講じ、被災地の復興に向けて、人々の心が大きく動きました。日本家計パネル調査の対象者にご協力いただき、6月に実施した「東日本大震災に関する特別調査」からは、この大震災が多くの人の価値観に変化をもたらしたことがわかります。下の図は、「自分のことよりも他人の事を第一に行動する」という点について、「あてはまらない」を0、「あてはまる」を100として、10段階で答えていただいた結果を、震災前と震災後で比較したものです。0~40のどちらかという自分のことを第一に考えている人の割合は、震災前においては34%でしたが、震災後には24%に減少しました。一方で、60~100のどちらかという他人のことを第一に考えている人の割合は、震災前には22%であったのに対し、震災後には37%にまで上昇しました。大震災を契機に、多くの人々の心に利他心が増大したことがうかがえます。

また、仕事に対する考え方にも、大震災を境に変化が見られました。下の図は、「仕事よりも家族・友人・知人を大事にする」という点について、「あてはまらない」を0、「あてはまる」を100として、10段階で答えていただいた結果を、震災前と震災後で比較したものです。0~40のどちらかという仕事の方を大事にする人の割合は、震災前においては15%でしたが、震災後には11%に減少しました。一方で、60~100のどちらかという仕事より家族・友人・知人を大事にすると考えている人の割合は、震災前には50%であったのに対し、震災後には65%にまで上昇しました。災害が、人とのつながりの重要性を再認識させたとうかがえます。

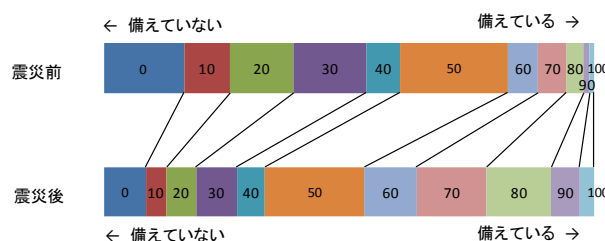


## 9. 人々の危機意識に大きな影響

### 人々の自然災害への備え

大震災を目の当たりにして、自然災害に対する備えにも変化が生じました。下の図では、「地震等の自然災害に備えている」という点について、「あてはまらない」を0、「あてはまる」を100として、10段階で答えていただいた結果を、震災前と震災後で比較したものです。0~40のどちらかという自然災害に備えていない人の割合は、震災前においては60%でしたが、震災後には33%に減少しました。

一方で、60~100のどちらかという自然災害に備えている人の割合は、震災前には18%であったのに対し、震災後には47%にまで上昇しました。震災直後は、各地で停電や食料の買い占めなどがおこり、人々の危機意識に大きな影響を与えたと考えられます。





## 10. 被災地復興への思い

今年、多くの人々が自分にできることはなにかと思いを巡らせた年ではなかったでしょうか。『東日本大震災に関する特別調査』においても、その状況が如実に表れています。回答者の7割以上の方が、「募金活動に寄付をした」と回答しており、「節電をした」と回答している人も6割に上ります。

また、「風評被害にあった商品やサービス（観光も含む）を購入した」と回答している人も全体の3割おり、「物資を送った」と回答した人も1割を超えています。1つ1つはたとえ小さな力であっても、多くの人々の力が合わさることで、復興に向けての大きな原動力になっていることと思います。

